

# C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese di Kyoto

現代イタリア事情 -Italia oggi- 第2回

## \* イタリアの行政区分と街々の多様性 \*

立元 義弘

人口6千万人のイタリア。世界中からの観光客で賑わう誰もが知る大都市から、ひっそりと丘の斜面に貼り付くようにたたずむ名もない小さな村まで、それらを人々の生活する“街”と呼ぶならば、そこにはそれぞれの個性的で多様な顔を持った街々がちりばめられています。

イタリア人が自分たちをイタリア人だと認識するのはサッカーのワールドカップの時だけというジョークがあるくらい自分たちの生まれ育った故郷の街を大切に考える彼らだからでしょうか、それとも中世都市国家の集まりが19世紀になって初めて統一国家となったという歴史からでしょうか、イタリアでは日本のように大都市への人口の集中化は進んでいないと言えます。100万人都市と言えば首都ローマと商業都市ミラノの2都市だけで、人口が日本の半分弱とはいえ、100万人都市が12もある日本とは対照的です。具体的なデータで比較してみると、全人口の10%が首都東京に集中している日本に対して、イタリアの首都ローマは半分の4.5%です。また、それぞれの10大都市の人口集中率でも日本が23%であるのに対して、イタリアは14%です。したがって各都市のサイズも日本と比べるとこじんまりとしたもので、イタリアの最大都市であるローマの人口は274万人とほぼ大阪市と同規模ですが、2番目のミラノとなると人口は130万人で、日本で10番目のさいたま市より少し多い程度です。(図1)

イタリアの行政区分は日本と比べると非常に細分化されており、行政区分単位あたり人口の単純

な比較だけでは十分でないということがあります。こうした都市への人口集中度合いの違いが、イタリアと日本の都市生活者のライフスタイルの違いにも反映されているところが大きいと思われるかもしれません。

イタリア		日本		
行政区分	州 (Regioni) 20 県 (Province) 110 市町村 (Comuni) 8,094	都道府県	47 市町村 1,727	
十大都市人口率	ローマ	2,744 (4.5%)	東京都	12,610 (9.9%)
	ミラノ	1,307	横浜市	3,621
	ナポリ	963	大阪市	2,534
	トリノ	910	名古屋	2,178
	パレルモ	656	札幌市	1,891
	ジェノバ	610 (14.2%)	神戸市	1,511 (23.4%)
	ポローニャ	377	福岡市	1,397
	フィレンツェ	369	京都市	1,385
	バーリ	320	川崎市	1,374
	カタニア	296	さいたま市	1,209
総人口	60,340千人	総人口	127,058千人	

【図1】日伊行政区分・10大都市人口比較

イタリアの行政区分には州(Regioni)、中枢都市圏(Città metropolitane)、プロヴィンチャ(Province)、コムーネ(Comuni)という四つのくりが定められており、現在、20の州、15の中枢都市圏、110のプロヴィンチャがあり、コムーネに至っては8094に上ります(2010年6月現在)。一概には言えませんが、大まかに言ってプロヴィンチャが日本の県に相当し、コムーネが市町村をひとくりにしたものと理解してよいと思います。日本の1都2府43県、1727市町村(2010年3月現在)と比べると先述のように非常に細分化された行政構造となっているのがわかります。(図1)

これらの行政区分を順にもう少し詳しく見ていきましょう。

まず、20の州ですが、このうちヴァッレ・ダオスタ州(Valle d' Aosta)、トレンティーノ・アルトアディジェ州(Trentino-Alto Adige)、フリウリ・ヴェネツィア・ジュリア州(Friuli-Venezia Giulia)の北部3州と、シチリア州(Sicilia)、サルデーニャ州(Sardegna)の島嶼部2州の、合わせて5州が特別自治州という位置づけとなっていて、これは憲法第116条に定められています。この仕組みはこれらの州の歴史的背景や民族・言語の違いを配慮することで統一イタリアを維持するために決められたもので、他の一般州と比べて財政的な自治権が認められており各州は税収の大部分の裁量権を持っています。また、少数言語民に対する配慮から、Valle d' Aosta はフランス語 Valee d' Aoste を、Trentino-Alto Adige はドイツ語 Südtirol を加えた2ヶ国語表記とすることも定められています。

州の下位構造には中枢都市圏(Citta metropolitane)と呼ばれる仕組みがあり、トリノ、ジェノバ、ミラノ、ヴェネツィア、トリエステ、ポローニャ、フィレンツェ、ローマ、ナポリ、パーリ、レッジョ・カラブリア、メッシーナ、カタニア、パレルモ、カリアリの計15の主要都市圏が定められています。実際の運用上においてはまだまだあまり実態のない区分であり、話題に上ることはあまりありません。

県にあたる110のプロヴィンチャのうち、トレンティーノ・アルトアディジェ州の二つのプロヴィンチャであるトレントとボルツァーノには前述の統一国家維持の観点から州レベルの自治権が与えられています。また、ヴァッレ・ダオスタ州はアオスタ県のみイタリアでは唯一の1州・1県の州です。

地方自治行政の最小区分であるコムーネは、前述のように現時点では8094あり、例えばピエモンテ州だけでも1206、ロンバルディア州には1544ものコムーネがあります。日本の市・町・村の3つの行政区分をひとくくりにしたものに相当しますから、それこそその規模は大小さまざまです。

面積・人口共に最大のコムーネはやはり首都のローマで1308km<sup>2</sup>の広さに274万人の人々が住んでいます。面積で2位のコムーネがラベンナの653km<sup>2</sup>、人口で2位のコムーネがミラノの

130万人ですから、どちらの点でもローマが断トツです。逆に最小のコムーネは面積ではトレンティーノ・アルトアディジェ州トレント県のフィエーラ・ディ・プリミエーロで0.15km<sup>2</sup>と日比谷公園くらいのはりです。人口ではロンバルディア州ソンドリオ県の山村ペデジーナで住民の数は33人とされています。人口密度で見ると最も人口密度の高いコムーネはナポリ県のポルティチという人口5万5千人の街で、1平方キロメートルあたり1万2千人強と地方のコムーネであるにも拘わらず東京23区並みの密集度合いです。しかも面積の2割以上が森林地帯で人が住んでおらず、居住地域だけの面積で計算すると人口密度は更に高くなります。一方、人口密度の最も低いコムーネはフランスと国境を接する山岳地域、ピエモンテ州クーネオ県のブリーガ・アルタで、ユニバーサルスタジオジャパンや東京ディズニーランドほどの広さに人口が51人、人口密度は1km<sup>2</sup>あたり0.96人となっています。

このように人口270万人を超える首都ローマから住民わずか30人あまりの山村までイタリアの“街”の姿は本当に様々ですが、その中には日本とのつながりの深い街もあり、イタリアと日本の間には35件の姉妹都市提携が結ばれています。これらの提携関係は、自治体間の国際交流や何かのコンタクトが縁となって提携に至ったもののほかに、地形・産業・歴史といった双方の類似性や共通性が取り持つ提携関係のケースが多いようです。

縁がきっかけとなったケースとしては、映画「遠野物語」がサレルノで開催された国際映画祭でグランプリを獲得したことが提携につながった例や、東京都板橋区の区立美術館でのポローニャ国際絵本原画展開催をきっかけに始まった絵本交流が姉妹都市関係につながった例があります。また、近江八幡市とマントヴァの提携は、天正遣欧使節がローマ法王に献上するための安土の街並を描いた屏風絵を持ってマントヴァを訪れた、16世紀にさかのぼる歴史から結ばれた姉妹関係です。長浜市とヴェローナは双方に拠点を持っていたキャンノの仲介によって実現したものです。

双方の類似性や共通性で結ばれた提携関係はその理由がバラエティに富んでいます。

首都同士の東京都とローマ、商業都市同士の

大阪市とミラノ、或いは歴史的古都としての京都市とフィレンツェなどは容易に納得できますし、片や錦江湾に噴煙を上げる桜島、片やナポリ湾を見おろすヴェズヴィオ火山で、共通の雄大な景観を誇る鹿児島市とナポリや、共に世界文化遺産に登録される独特の住居集落で有名な岐阜県白川村とプーリア州アルベロベッコなども結ばれるべくして結ばれた姉妹都市だと言えるでしょう。(写真1、2)



【写真1：白川村】



【写真2：アルベロベッコ】

物産やイベントの共通性によるものも多くあります。青森県田子町とエミリア・ロマーニャ州のモンティチェッリ・ドジーナはどちらもニンニクの産地としての提携ですし、山形県天童市とヴェネト州マロスティカは名物の人間将棋と人間チェスが取り持つ関係です。少し変わったところでは、静岡県伊東市とラツィオ州リエーティです。こちらは、松川たらい乗り競争とヴェリーノ川ワイン樽乗リレー

ス(Palio delle tinozze)というよく似た年に一度のお祭りが共通テーマです。(写真3, 4)



【写真3：松川たらい乗り競争】



【写真4：Palio delle tinozze】

最も風変わりな姉妹都市関係は群馬県渋川市とウンブリア州フォーリーニョでしょう。共通のテーマは“へそ”で、どちらもがそれぞれの国の中心に位置した町だという理由での提携です。ただ、フォーリーニョの方は一枚上手でさらに世界の中心だと言うのです。「町の中心にあるBarのビリヤード台の中心に置かれたピンが世界の中心だ。なぜならそのバールはフォーリーニョのど真ん中にあるからで、そのフォーリーニョはウンブリア州の中心だ。そして、ウンブリア州はイタリアの中心で、イタリアはヨーロッパ・地中海の中心、ひいては世界の中心だ。」という言い伝えがあるのだそうです。もっともこのバールも今はなく、現在は銀行になっていて、その銀行のロビーフロアに件のピンが今も埋め込まれているそうです。

(大阪大学講師、元パナソニックイタリア社長)



## イタリア通信

### 第5回『異文化理解の道すがら』

- tanto amore, tanto rancore -

深草 真由子

イタリアを旅すること、そこで暮らすことは全く別物である。太陽の光が降り注ぐ地中海。地方色豊かなおいしい料理。映画やテアトロの娯楽文化。明るく陽気なイタリア人と響きの美しいイタリア語。町を歩けばあちこちで歴史的文化遺産に出会える国…。その一方で、壊れたままの券売機。郵便局の長い行列。トイレトペーパーは言うまでもなく便座もない、男女共用の汚い公衆トイレ。TPOを構わず鳴り響く携帯の呼び出し音と迷惑な話声。あたかも地震の後の有り様のように商品の散乱したスーパーマーケット。テレビの中の、肌を露出した女性が踊る姿とベルルスコーニのニタニタ笑い。横柄だったり、無愛想だったり、他人への気遣いに欠けたりするイタリア人。町を歩けばあちこちで犬の糞、煙草の吸い殻、回収されずに溢れたゴミの山に出くわす国…。そんな溜息をつきたくなるようなあり様もこの“Bel paese”の真の姿である。

それも愛嬌の内だ、これがイタリアらしさなのだ。と旅人は言うかもしれない。実際、規則だった秩序の中で生きている日本人にとって、たまにイタリアというカオスの中を探検するのは楽しいことだ。しかし、いざカオスの中で暮らすとなれば、笑って済ますことのできない壁にぶち当たる。「自分はイタリアには向かないのではないか？」と考え込む者もいるだろう。正直に言うと、私の場合はまずイタリア人に対して怒りを感じるようになり、それが収まらない場合は「どうせ彼らはこの程度だから」という諦めとも侮蔑とも解釈できる気持ちに行きついてしまう。もちろんこの感情は不遜で、単に異文化とのギャップに苦しむ自分への慰めであることは十分承知している。しかし、そうでもしないと気分が落ち込んでやりきれなくなることが時々あるのだ…。この怒りと諦めの段階を乗り越えた先には何が待っているのだろうか？より寛大で、タフに成長した自分がいるのだろうか？



【町に貼られた環境美化ポスター】

イタリアに対する愛憎の微妙なバランスの上に成り立つ生活。異文化を理解することは決して容易なことではない。常に日本とイタリアを比べてしまう。親切で行儀がよく、他人への気遣いのできる日本人。便利で清潔な町。時刻表通りに動く電車。スムーズに物事が運ぶ快適さ。—最新のI-phone をイタリアで購入しようとした時のこと。どこでも好きな時にインターネットができるというのに、どうやら我が家には電波が届いていない。電話会社の電波マップを見ると、ほぼ全面的に色づけされた町の中でちょうど我が家の辺りだけが空白のまま残されている。私は何も山奥に住んでいるわけではないのだが…こんなことが日本で起こるだろうか。

ではイタリア人の目から見た日本とは？イタリアにおける日本への関心は一時的なブームを通り越し、もはや定着した感がある。「今の日本に待はない」「日本人は生魚を食べる」といったことは今ではもうイタリア人にとっても自明であり、普通はより高度な質問が飛んでくる—Banana Yoshimoto はペンネームなのか？米はどう調理するのか？なぜラジオ体操をするのか？—多くのイタリア人が(いや、少なくとも東洋人である私

と親しくするようなイタリア人は)「日本に一度行ってみたい」と言う。しかし、それを聞いて私は内心嬉しい反面、いつも少し不安になる。「日本を旅行して、本当に満足してくれるものだろうか」と。

歴史的建造物、文化的遺産の中で日常生活を送っているイタリア人にとっては、灰色のコンクリートで埋め尽くされた日本の都会が魅力的に映るのだろうか。観光地に立ち並ぶ巨大なホテル、ゲームセンターやカラオケボックスがイタリア人にとって美しいものに見えるだろうか。多くの外国人が日本の観光を楽しんでいるのだから、実際、面白い所なのだろう。だが日本、特に日本の都市は単に興味深いというだけであって、決して居心地の良い場所ではないし、いつかまた戻ってきたいと一般のイタリア人を思わせることができるだろうかという心配がいつも頭をよぎる。

先日ブラジル人の親友 Ana が「来週日本に行くのよ。ついにあなたの国を見に行ってくるよ」とメールで知らせてくれた。パドヴァに住んでいた頃、彼女とは毎晩のように一緒に料理を作った仲だ。Naturalista の彼女はいつも私の料理を褒めてくれた。油控え目で野菜中心、肉少々、魚も少々、醤油、豆腐、味噌、海藻類…。「Tu mangi sano!!!」。冷凍食品や炭酸飲料をよく摂っていた他の同居人とは違って、私の健康的で独特な食生活は彼女に好印象を与えたようだった。そんな彼女がコンビニでインスタントラーメンのずらりと並んだ棚を見て何を思うだろう。「日本食がヘルシーだというのは嘘だ。日本人はプラスチックの容器の中に詰められた人工物ばかりを食べている」と幻滅しないだろうか。

「隣の芝は青いんだよ“L' erba del vicino è sempre più verde”」と日本マニアのイタリア人コンピュータ技師 Vincenzo は言う。彼は日本語を勉強し、いつかは東京で働きたいという夢を持つ。「イタリア人はエゴイストだから嫌いだ。その点、日本人は親切で穏やかで、公共心がある」。そこで私は言う、「日本人の親切は本心からのものとは限らないヨ」。例えば、混雑するスーパーのレジで客が端数の小銭を出そうと、財布の中を探ってもたついているとどうだろう。日本人の店員はマニュアルで定められた通りの笑顔と丁寧な言葉遣いで上辺を装ってはいるが、一刻も早く列を進めたいために内心では「小銭なんか要らないから早く

出て行って！」とイライラしているかもしれない(少なくとも私の経験ではそうだ)。だが Vincenzo は断言する。「イタリア人の *cattiveria sincera* より日本人の *simpatia finta* の方がずっと害が少ない」。先日イタリア人の若い男女が、道に並べられたバールのテーブルで休む観光客の中年夫婦に突然殴りかかる場面を目撃した。コーヒーか煙草が若者の服を汚したのかもしれないし、あるいは単に自分達の進行方向にあるテーブルが邪魔だったのかもしれない。些細なことで理性を失った若者たちの乱暴な姿に、どこか動物的なものを感じた。秩序のないイタリア。形式だけは重んじられる日本。どちらの芝もそう青々とはしていない。

だが欠点があるからこそ美点が輝くのである。イタリアで最も素敵なのは、やはり人と人の暖かいつながりが今もあることだろう。外国からイタリアの空港に到着して、スーツケースを受け取って出口に向かう時、いつもたくさんの人々が誰かの到着を待っているのを目にする。家族や友人の姿を見つけると大きく手を振って名前を呼び、そして抱きしめてキスを交わし、再会の喜びを体いっぱい表現している。その反面、閑空に降り立つ時の寂しいことと言ったら…。帰国した日本人を待ち構えているのは両替カウンターの案内係一人だけ、ということも珍しくない。

私のイタリア生活において最も心に残った言葉は友人 Luisa が発したものである。彼女はボローニャで生物学の任期付き研究員として働きながら結婚し、一カ月以上もの間、新婚旅行に出かけ、子供を二人産んだ。「日本の女性研究者ではこんなことはそう簡単にはできないだろう。プライベートが充実していて羨ましい」と私は傍で見ていたものだ。しかし昨今の大学改革の波に巻き込まれ、結局彼女の雇用契約が延長されることはなかった。今は子育てに専念しているが、やがては子供を保育所に預けて自分は外に働きに行きたいと言う。イタリアの現状は厳しい。職場をより好みする余裕はない。だからといってボローニャを離れるわけにもいかないだろう。他人事ながら心配になった私は、行き先に迷う日本人たちがよくするあの質問を試してみた。「この先どうするの？」すると Luisa は明るく「なんとでもなるでしょう。人生はいつもサプライズだからね」。逆に日本では定ま

ったものが何もなく、先行きの見えない人生に不安を覚える若者も多数いるというのに。イタリア人のパワーはこんな人生観にあるのかもしれない。

今回は異文化理解の底知れない難しさと、今まさにそれと奮闘している筆者が日々感じていることを正直につづってみた。偏見や安易な類型化があるかもしれない。それでも、異文化理解を概

念として知るだけでなく、実体験を通して沸き起こるマイナスの感情もあるということ、また逆に新たな発見や喜びもあるということを伝えることができたならば幸いである。

(元当館スタッフ)

## … 会館 だ よ り …

### 高級娼婦と芸術家のビミョウな関係

京都文化博物館で開催中の「ナポリ・宮廷と美 カポディモンテ美術館展」。この展覧会の中でも特筆すべき出典作品である、パルミジャーノによる《貴婦人の肖像(アンテア)》。貴婦人と冠されてはいるものの、実はパルミジャーノがローマで親しんだ高級娼婦という言葉い伝えもあり。ルネサンス期、イタリア語でコルティジャーナと呼ばれる高級娼婦は、多くの美術家を刺激し、その創造性に大きく寄与したのです。そんな高級娼婦と芸術家の妖しくも微妙な関係にスポットライトをあてて、その創造の源をたどります。

講師: 松本 典昭(阪南大教授、文化史家)

日時: 11月6日(土)

18:00~20:00

参加費: 1500円(一般・受講生)

500円(個人維持会員)

会場: 日本イタリア京都会館 本校



### イタリア的ライフスタイル

20年の長きに渡りイタリアで暮らし、ビジネスの最前線に身を置かれた元パナソニックイタリア社長 立元義弘氏が、多くのイタリア人との交流を通じて見聞きし経験したイタリア人の生活観、家族観などなど、旅行者の目ではなかなか垣間見ることのできないイタリアならではの魅力的なライフスタイルをご紹介します。

講師: 立元 義弘(元パナソニックイタリア社長)

日時: 11月13日(土)

17:00~19:00

参加費: 1500円(一般・受講生)

500円(個人維持会員)

会場: 日本イタリア京都会館

大阪梅田校

### イタリア的ライフスタイル 会食つき

20年の長きに渡りイタリアで暮らし、ビジネスの最前線に身を置かれた元パナソニックイタリア社長 立元義弘氏が、多くのイタリア人との交流を通じて見聞きし経験したイタリア人の生活観、家族観などなど、旅行者の目ではなかなか垣間見ることのできないイタリアならではの魅力的なライフスタイルをご紹介します。

シチリアで修業された関シェフのお店「ビベロン」でフルコースランチに舌鼓を打ちながら、楽しい話に耳を傾けてみませんか

講師: 立元 義弘(元パナソニックイタリア社長)

日時: 11月23日(火・祝)

12:00~15:00

参加費: 5500円(一般・受講生)

4500円(個人維持会員)

会場: イタリア料理ビベロン

(京都 御幸町押小路)

編集・発行 / (財) 日本イタリア京都会館  
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4  
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357  
E-mail: centro@italiakaikan.jp  
URL: http://italiakaikan.jp/